

# 「周南学」の編集に向けて

－歴史的課題①－

Editing "Shunan-gaku"

－ Approches from Historical Standpoint ①－

兼 重 宗 和

## はじめに

本稿は、本学学生が歴史的側面から「周南学」を学ぶにあたり、周南の歴史的特色を見だし、その歴史的事象を成り立たせている要因を調査・研究し、歴史的課題の解決や将来像について考察する一助となることを目的として執筆する。

周南市は、2003年4月に徳山市、新南陽市、熊毛町、鹿野町の2市2町が「平成の大合併」により誕生した。しかし、基本史料となる合併後の『周南市史』は、発刊されておらず各市町村史等を参考に調査・研究を進めてもらいたい。

## 古代の周南

### 1) 縄文・弥生期

山口県は本州最西端に位置しアジア大陸に近く、大陸の文化が早くから伝わり紀元前2～3世紀には稲作が行われていた。山口県の古代人の分布と生活は、その遺跡分布や出土品から海岸沿い・河川を伴う盆地に遺跡の多くが存在している(図1)。縄文時代期の出土品に狩猟関係する石斧・石鏃(用田遺跡等)や鹿や猪の骨(六連島)や漁猟に使用した石錘・釣針(用田・綾羅木遺跡)、植物採取として桃・梅・どんぐりの実(岩田遺跡)が発掘されている。また畑作・稲作が始まった弥生時代からは、集落周囲に溝(下関潮待)をめぐらし、装身具の耳飾が出土し(山口市能美ヶ浜・秋吉台三角原)定住化が進展し村落が出現した。遺跡の中でも岩田遺跡は、熊毛半島西岸の平生町にあり、縄文時代中期から弥生時代、古墳時代後期までの長い時代にわた

る遺跡である。比較的小規模な遺跡の多い西日本の縄文遺跡の中でも約6000㎡を越えるその規模は瀬戸内地方随一であり、様式から瀬戸内文化と九州文化の接触が窺える。出土の多くは縄文土器で、灰黒色の磨研された浅鉢型や甕型の土器、石鏃、石錘、土偶、



岩偶、岩版などのほか、ドングリの貯蔵穴群と甕棺墓が発掘されている。

弥生時代では、本州最西端に位置する下関市の綾羅木郷遺跡がある。この地域は、北九州地域とともに弥生時代の中心地域で、国指定遺跡である梶栗浜遺跡・土井ヶ浜遺跡などがある。綾羅木郷遺跡は、丘陵の全面を占め、東部の地域には竪穴住居跡や埋葬遺構が、中央部から西側は弥生時代前期の袋状竪穴群や弥生時代中・後期の溝などが発掘されている。また台地の西北の端には、前方後円墳もある。遺物としては、弥生時代前期前半の土器や多くの石器などが発見されている。また、同市安岡梶栗浜の梶栗浜遺跡は、弥生時代の墓地遺跡で、鏡、銅剣、土器などの遺物が出土し、そのうちの青銅器は、我が国で発見例の少ない朝鮮古代のものである。同市の土井ヶ浜遺跡は、弥生時代前期の終わりごろを中心として営まれた集団墓地で、砂地の丘にある。完全な人骨が発見され、人類学の研究上重要な遺跡である。阿東町の宮ヶ久保遺跡は徳佐盆地の沖田川沿いに所在し、弥生時代中期中頃～後期（紀元前1～3世紀）の集落遺跡である。この集落を囲む二重の大溝からは、多量の木製品が出土し全国的にも特色ある弥生中期の遺跡である。出土品に農耕具（鋤、鍬、掘り棒、砧、臼）、工具（斧、手斧、掛矢）、生活用品（紡錘車、機織、梯子、樹皮袋、弓）、食器（椀、鉢、杓子、桶、高坏）、武器型（剣、戈、戟、鏃）、祭器（蛙、猪、鳥）があり、そのほか、土器類（壺、瓶、鉢、高坏）、鉄製品（鉄斧、槍鉋、小刀）、石器類（斧、包丁、鎌、鏃、砥石、紡錘車、石剣）等がある。

## 2) 古墳時代

次に、古墳時代の代表的な遺跡・出土品を取り上げよう(図2)。

周南市新南陽の竹島御家老屋敷古墳は、4世紀前半につくられた県内最古の前方後円墳である。全長56m、後円部の直径35m、前方部の



幅は23mあり、後円部に竪穴式の石室がつくられている。明治21年に発掘され出土品35点は、個人の所蔵となっています。このうち銅鏡3点は特に注目され、魏で作られた「正始元年銘三角縁階段式神獸鏡」<sup>1</sup>「天王日月四神四獸鏡」と呉で作られた「劉氏作神人車馬画像

正始元年銘三角縁階段式神獸鏡  
鏡」とがあり、同じ古墳から魏と呉の鏡が出土した例はなく、当時の倭国が魏だけでなく呉とも交渉を持っていたことを示す貴重な資料である。また、これらは大和朝廷の古代国家統一の歴史とも深く結びついていて、この古墳に葬られた被葬者は、当時の強力な豪族であったことを示している。特に「正始元年銘三角縁階段式神獸鏡」は、蟹沢古墳(群馬県高崎市)や森尾古墳(兵庫県豊岡市)から出土した銅鏡と同範鏡であり全国で3面が発見されている。



中国の『三国志』「魏書」東夷伝(【図3】<sup>2</sup>)に卑弥呼は、景初2(238)年に魏の皇帝に大夫難升米らを使いを送り、男女の生口30人や織物を献じた。

魏帝は、親魏倭王の称号と金印紫綬を授けられ、さらに銅鏡100面、織物、

1) 「周南市文化財」<http://www.city.shunan.lg.jp/section/ed-sports/ed-shogai-bunka/bunkazai/takesima.html>

2) <http://www.g-hoppr.ne.jp/bunn/bisihtml>

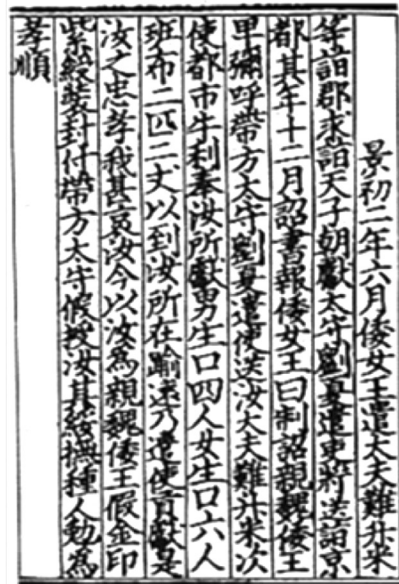
金8両、5尺刀2口を贈られた。この卑弥呼の遣使が持ち帰った銅鏡は全国で54面発掘され、新南陽の竹島御家老屋敷古墳から発掘された正始元(240)年銘三角縁神獸鏡もその内の1面と考えられる。また「天王日月」銘の三角縁神獸鏡は、京都府椿井大塚山古墳出土鏡の三面、神奈川県白山古墳出土鏡、福岡県神蔵古墳出土鏡の合計五面との同范関係が知られている。神人車馬画像鏡も、「劉氏作」の銘を持ち、大分県鑑堂古墳出土鏡、奈良県天神山古墳出土鏡等にみられ類例が少ない。

下松宮ノ洲古墳は、円墳と伝え規模も不明である。この古墳は享和3(1803)年に遺物が出土したため埋め戻され、明治25(1892)年に再発掘された。鏡4面(国重文:3面中国製、1面日本製)が出土し、中国製三角縁盤龍鏡に「天王日月」、「君宜高官□」等の銘がある。被葬者は、竹島御家老屋敷古墳とも関係ある人物で当地域と瀬戸内海の海上交通にかかわりを持ち、畿内勢力と関係を持った豪族であったと考えられる。下松(降松)は、597(推古5)年に百済国王子の琳聖太子が来朝し、聖徳太子に接見後に多々良姓を賜り日本に帰化し、後の大内氏の祖先となったとの話もある(『大内多々良氏譜牒』『妙見縁起』『鷲頭山旧記』)。下松の地名の起こりは、「百濟待」あるいは「百濟津」が訛つてものだとする説もある。

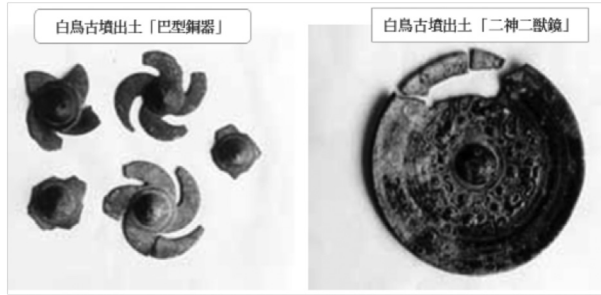
周南市の周辺部に所在する代表的な古墳として下記のものがある。

白鳥古墳は、全長120m、後円部の径64m、高さ11m、前方部の径60m、高さ8.5mの古墳時代中期の前方後円墳で、塚上に葺石を敷き円筒埴輪を並べ山口県・広島で最大規模である。古墳の東側の部分には幅20.8m、深さ2.1

【図3】



mの周濠がある。江戸時代に白鳥神社の社殿建築時に竪穴式石室から、鏡、玉や鉄斧などの鉄製品、巴形銅器などが発掘され



た(写真:平生町HP)。墳丘には、埴輪が存在した。古墳時代中期(5世紀)、西部瀬戸内海の海上交通を支配し、周芳国(7世紀末に周芳から周防に改称)の支配者の墓と考えられている。日本製青銅鏡の四神四獸鏡1面と二神二獸鏡1面があり、畿内から伝わった鏡とされる。

田布施町川西の国森古墳は、約30m四方の周防国を代表する方墳であるとともに3世紀末から4世紀前半に造られた県下最古の古墳である。古墳には長さ4mの縦



穴に箱式木棺墓が納められていた。山口県内で前方後円墳が登場する以前の古墳として貴重である。副葬品は、57点が発掘された。連弧文昭明銅鏡鏡1面(面径9.1cm、銘文「■内□□□□□□□□□□(光)□□(夫)日月」)<sup>3</sup>、鉄製武器(剣、槍、鉾、鏃)、鉄製工具(斧、鑿、槍鉋、削刀子、やす、針)で、鉄製武器の種類が多く鉄製農具や玉類がないことに特色がある。削刀子は、畿内と岡山県の古墳に一系列ある特殊な工具である。これらから古墳に埋葬された豪族



3)「山口県の文化財」<http://bunkazai.ysn21.jp/bunkazai/detail.asp?mid=110063&pid=bl>

は、大和の勢力とつながりを持ち、瀬戸内海東部の周防部を支配する独立した勢力の支配者と考えられる。

柳井市の茶臼山古墳は、古墳時代前期の前方後円墳（全長79m）でこの地域では大きな墳で国の史跡指定である。古墳の前方部に埴輪円筒列が一部残存し、後円部の頂上は葺石がなされた。この古墳は1892年（明治25）地域の人により発掘された。後円部内に竪穴式の石室があり、鏡5面、鉄製の剣・鉾・鏃・刀子などが出土した。鏡の中でも単頭双胴怪獣鏡は漢式模造鏡で径44.8cmあり、我が国の古墳から発見された鏡としては最大級である（写真）。全長80メートル、後円部径約50メートル、前方部幅40メートルを測る。

防府市高井の大日古墳は、全長約45m、前方部の幅約20m、後円部の径約19mの前方後円墳で後円部に横穴式石室がある。石室は花崗岩の割石で作られ、棺を納めておく玄室と羨道（約9.3m）からなる。玄室に県下唯一である凝灰岩製の刳抜式屋形石棺がある。この古墳は、大内氏の祖先といわれている百済の国の王子琳聖太子を埋葬した墓とする説もある。

前方後円墳は、瀬戸内海側に多く、箱式石棺墓は中国地方に多数見られる特色があり国造と関係との関係を明らかにできることが望まれる。また、方形周溝墓も西日本には多く見られる。

古代の城は、北九州と中国・四国に十二カ所あり、その一つに光市岩城山神籠石と呼ばれる山城がある。石城山神籠石は7世紀ごろ築城され、周囲の約2.6kmに列石を配列して土塁がとり囲み、谷間には石垣を築き、中央に水門がある。朝鮮式山城に似ている。石城山は山陽道や瀬戸内海航路を支配する上で重要な位置にあり、この一帯が小周防とよばれていることなどからも、





周防国造の本拠地であったとも考えられる。周防古代の大和朝廷と周防の情勢を解明するうえで重要な遺跡である。山頂には延喜式内社である石城神社が鎮座し、本殿は国の重要文化財に指定されている。明治維新前には第二奇兵隊の根拠地となった。築造年代は古文獻に記載がなく、未解決である。

### 3) 国造

次に国造について述べよう。

日本の古代を探る基本的史料として『古事記』・『日本書紀』がある。『古事記』は日本最古の歴史書で太朝臣安萬侶が712（和銅5）年に編纂され、元明天皇に献上されたが、原本はなく南北朝時代の写本が残っている。『日本書紀』は、720（養老4）年に完成した最古の正史で神代から持統天皇までを記載する。この歴史書や『先代旧事本紀』の「国造本紀」、『続日本紀』によると、大和政権は4～5世紀頃に統一国家を形成され、山口県内に次の7つの国造と1つの県を置いたことが記載される（図4）。

#### ①大嶋国造

成務天皇（志賀高穴穗の帝）期（131～190年）に无邪志<sup>むさし</sup>国造と同祖の兄多毛比命<sup>えたもひのみこと</sup>の子の穴委古命<sup>あなわこのみこと</sup>が国造に任命された。周防国の大島郡部を支配した。

#### ②周防国造

応神天皇（軽島豊明の帝）期（270～310年）に茨城国造と同祖の<sup>か</sup>米乃意美<sup>めのおみ</sup>が国造に任命された。周防国の熊毛郡・玖珂郡部を支配した。氏族は周防氏で姓は凡直であった。

#### ③波久岐国造

崇神天皇（瑞籬の帝）期（前97～前30年）に阿岐国造と同祖の<sup>かなはさひこのみこと</sup>金波佐彦命<sup>とよたまねのみこと</sup>の孫の豊玉根命が国造に任命された。周防国の吉敷郡部と防府の一部を支配した。

#### ④都怒国造

仁徳天皇（難波高津の帝）期（313～399年）に紀臣と同祖の<sup>つぬのすくね</sup>都努足尼<sup>つぬのすくね</sup>の子の田鳥足尼（男嶋足尼・鳥足尼）が国造に任命された。周防国の

都濃郡部（現周南市・下松市）を支配した。氏族は角氏で姓は臣であった。

⑤阿武国造

景行天皇（纏向の日代の帝）期（71～130年）に神魂命の十世孫の味波波命が国造に任命された。長門国東部の阿武郡部を支配した。氏族は阿牟氏で姓は公であった。

⑥穴門（あなと）国造

景行天皇期に櫻井田部連と同祖の邇伎都美命の四世孫の速都鳥命が国造に任命された。長門国西部を支配した。氏族は穴門氏で姓は直であった。

⑦玖珂国造

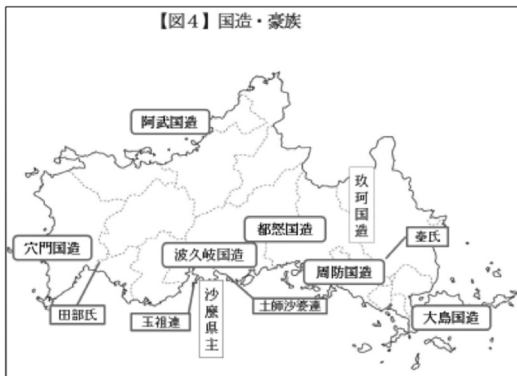
721（養老5）年に熊毛郡から新たに玖珂郡を分立し置かれた。柳井の伊保庄を除く。

⑧沙麼県主

佐波郡沙麼の浦に置かれた（『日本書紀』仲哀記 神功摂政前紀十二月戊戌朔辛亥 周防国佐波郡佐波郷）。

①大嶋国造の支配領地は、長屋王の封戸（直轄地）との説が強い。日本最大級の大鏡が出土した茶臼山古墳（4世紀末・前方後円墳、国指定）や白鳥古墳（5世紀中期・前方後円墳、県指定）は、②周防国造と関係の深い古墳

とされる。④都怒国造は紀角宿禰の一族が勤め、山口県内最古の新南陽竹島御家老屋敷古墳（4世紀前半・前方後円墳）・下松宮ノ州古墳（4世紀・円墳）と関係あるとされる。竹島御家老古墳出土の「正始元年銘三角縁階段式神獸鏡」は、





邪馬台国の女王卑弥呼が魏王から銅鏡を贈られた翌年であり、「魏志倭人伝」の記載と関わりがあると考えられている。また、魏志倭人伝に記載される「姐奴国」は筑後国竹野郡とされるが、発音から「瀬戸国」或いは「撰津国」の説があり、瀬戸国とするなら姐奴国は都濃郡に所在したのではないかとする説もある。しかしながら、当時の瀬戸内海の海上交通にかかわりを持ち、畿内の勢力と密接な関係を持った豪族であることは間違えないであろう。隣接する下松宮ノ洲古墳被葬者も当地の統治をした豪族と考えられる。萩の円光寺穴観音古墳（6～7世紀・市指定、円墳）や阿武の山崎古墳（古墳期後期）は⑤阿武国造と関係する古墳とされる。下関の仁馬山古墳（5世紀末・前方後円墳、国指定）は、⑥穴戸国造と関係する古墳とされる。防府の大日古墳（5世紀中期・前方後円墳、国指定）・車塚古墳（6世紀中期・市指定、前方後円墳）・鑄物師古墳（6世紀後半・市指定、円墳）は、沙塵県主の一族と関係する古墳と考えられている。

#### 4) 周防国の名称

次に周防国の起源について考察しよう。周防国の「周防」の由来は明白ではないが、谷や崖の側、又は崖の斜面を意味する言葉に「すはう・すおう」がありこれが変化したという説もある。しかし、元々この地域が「すはう」と呼ばれ、これに漢字を当てたことは間違いなかろう。史料的には、『和名抄』に「須波宇」とあることからそのことは窺える。大化2（646）年春、大化の改新の詔が発布され、現在の山口県は、周芳（周防）・穴門（長門）の2国に統合された（『和名抄』）。天平（673）年には、大竹河（小瀬川）を安芸・周防両国の境と定めた（『続日本紀』9月16日条）。

藤原京の木簡に「周方国」・「周防国」、平城京の木簡に「周芳国」・「周防国」と表記されている。『日本書紀』によると天武10（681）年に「周芳国、貢赤龜」と初見し、また『続日本紀』の文武天皇元（697）年に「周防国」と翌年「周芳国献銅鉞」と、文武天皇4（700）年に「直広参波多朝臣牟後閉為周防総領」と任官記載される。このことから7世紀に周芳国として設けられ、7世紀末

に周防国に改称されたことが分かる。周防国は、最初大島郡、熊毛郡、都濃郡、佐波郡、吉敷郡の五郡から形成されたが、養老5（721）年に熊毛郡から玖珂郡が分けられ六郡となった。

現周南市の都濃郡は、久米郷（徳山市東部から下松市地域、久米部の人々が多く住む）、都濃郷（徳山市北部の須々万の盆地、郡の中心部と考えられる）、富田郷（富田川流域）、生野郷（下松市花岡・生野屋・久保・米川、山陽路の駅家）、平野郷（福川・夜市・湯野あたり、駅家）の五郷からなっていた。

### 5）式内社と周防守

周南市内の延喜式内社は、『延喜式神名帳』によると熊毛神社（周南市呼坂）、大歳神社（周南市大字樋ノ口）、二俣神社（周南市大向）、周方神社（周南市長穂）、二所山田神社（周南市鹿野上）等の小社10座8社が記載されるが大社は存在しない。二俣神社は、天安2（858）年に官社となり貞観9（867）年に正五位に昇格したこと以外に殆ど史料が発見されていない。「二俣神社本記之写」（1591年）に政務天皇の時に大物主神、八千戈之神、稲田姫命の三神を安置し、仲子氏が官司を代々務めた。都濃郡は、大化改新後都濃郷となり群家が置かれた。その場所は、式内社の二俣神社のあった須々万地域と考えられる。

周防守に就任した人は次の通りである。

最初に波多朝臣牟後閉が、文武天皇4（700）年に任じられている（『続日本紀』卷第一文武天皇四年冬十月己未）。その後、藤原真野麻呂（799年任官）、文室長谷（805年任官）石川道成（810年任官）、安倍真直（811年任官）、文室正嗣（811年任官）、石上美奈麻呂（812年任官）、菅野高世（820年任官）都努福人（841年任官）春澄善繩（842年任官権守）、安倍甥麻呂（847年任官）、三統真浄（853年任官）、伴河男（854年任官）、藤原直道（859年任官）、多治弟梶（862年任官）、紀安雄（882年任官）、小野当岑（886年任官）清原元輔（974年任官）、藤原重通・源頼親が周防守となった。周防守は、以前の地元有力者が引き継いでおり、大宝律令は発布後荘園制の実態を受けて

数回に及ぶ改正が行い改善を図ってきたが、村上天皇以後乱れてきた。

周南の平安時代の荘園は、東側を境に野上庄と遠石庄があった。遠石庄は石清水八幡宮に寄進され、遠石八幡宮が存在する。野上庄は徳山市街地にあったが、詳細は不明である。

### おわりに

縄文・弥生期の遺跡の分布は、海岸沿いや河川に沿って平地が所在する場所に多く見られる。狩猟・漁業や植物の採取生活から稲作が普及することにより次第に定住化が進み村落が形成されていった。それは、土地や権力を巡り首長同士の争いが起こる要因となり防衛施設や武器が発達した。遺跡・出土品からそのことは窺える。つまり、ドングリや梅・桃の種が出土とともに鹿や猪の骨も発掘され、狩猟に用いた石鏃や鏃、漁業に使用する骨製の釣り針や網に用いる石錘が出土している。そして周囲に溝を巡らせた集落も発見され、耳飾りなどの装身具が出土し、これは統制力を持った村落が出現したことを物語っている。北九州とともに弥生文化がこの地域に伝わり、河川流域や海岸沿いに弥生遺跡が集中する。中には水田耕作に不向きな弥生遺跡もあり、畑作農業が発達したことが分かる。それは、炭化した米・大豆・小豆・豌豆・蚕豆などの種は出土していることから窺える。農具も鉄製となり紡錘車の出土から機も織るようになっていた。埋葬も弥生時代からは、平板な石を組み合わせた石棺や壺棺に移行した。そして、さらに階層分化が進んでいった。

その顕著なものとして、大規模な古墳がそれを物語っている。周南地方には、早期の方墳や前方後円墳が瀬戸内海沿岸や島に所在し、古墳時代中期も大規模なものが造られたが後期になると小規模なものが多数造られている。周南市の久米・栗屋・下上・上村・富田地区に多くの小規模な円墳・方墳がみられる。

大化の改新以前は、山口県内の周防部に大島国・周防国・都怒国、長門部に穴戸国・阿武国などがありそれぞれの国造が治めていた。周防部では、周

防国造の支配地が最も開発され、それに次いで長門部の沙塵県主の支配地域が繁栄していた。大化の改新により周防国の名をそのまま使用するとともに、強大な周防国から離れた沙塵県に庁衙を置いた。都濃郡は、大宝律令の規定により大領・小領・主帳がそれぞれ一人置かれ、郡司に紀氏と同族の都努氏（角氏・都濃氏）一族が任用され、郡家を須々万に置いたとされる。

歴史の流れの中で古代は特に史料が少なく、考古学や民俗学・人類学・地質学等の研究成果を利用し総合的に考察しなければならない。

#### 【参考文献】

- 徳山市史編纂委員会編『徳山市史上巻』（1984年）第一法規  
徳山市史編纂委員会編『徳山市史史料 上』（1964年）徳山市役所発行  
下松市史編纂委員会編『下松市史』（1989年）下松市発行  
新南陽市史編纂委員会編『新南陽市史』（1985年）新南陽市発行  
鹿野町史編纂委員会編『鹿野町誌』（1991年）ぎょうせい  
光市史編纂委員会編『光市史』（1975年）大村印刷  
田布施町史編纂委員会編『田布施町史』（1990年）ぎょうせい  
熊毛町史編纂委員会編『熊毛町史』熊毛町発行（1992年）ぎょうせい  
後藤陽一監修『平生町史』（1978年）大村印刷  
近藤清石編『山口県風土誌』（1972年）歴史図書社  
小川国治『山口県の歴史』（1996年）山川出版  
可兒茂公編『山口県寺院沿革史』（1977年）防長史料出版社  
山口県編『山口県史資料編 古代』（2001年）山口県発行